

土佐浄瑠璃の脚色法（十九）

—「周防内侍美人桜」—

鳥居 フミ子

土佐浄瑠璃「周防内侍美人桜」は扉表に「宝永五戊子初秋上旬」という年号の記載のある木下甚右衛門板行の八行四十六丁の正本がある。木下板土佐浄瑠璃正本の表紙見返しに貼付されている「六段物板行出来合目録（六段物目録）」には二十六番めに記されている。したがって、土佐少掾橋正勝の没後、一括して板行されたものの一つで、土佐少掾の全盛期の語り物と考えられる。⁽¹⁾

また、木下甚右衛門からは右と同板で、扉表の年号だけを削除した正本も板行されている。⁽²⁾これは年号の記載のある正本の板行の後に、やや年月を隔てて板行されたものと考えられ、「周防内侍美人桜」が相当に流行した曲であったことがうかがえる。

段物集には「色竹」をはじめ、初期のものには収められていない。後期の段物集「蘭曲千代竹」四にはじめて次の四段が収められている。

田打哥

手まりつき

美人桜道行

まんさい

したがって、土佐少掾橘正勝の語りものとしては後期のものであったことは確かである。

二

土佐浄瑠璃「周防内侍美人桜」は題名が示すように、周防内侍を主人公とする浄瑠璃である。

周防内侍は平安時代後期の女流歌人で、『千載集』をはじめとする勅撰集に三十五首が入集しており、『悦目抄』・『袋草子』・『古来風躰抄』・『山家集』・『無名抄』・『八雲御抄』・『今鏡』・『兼載雑談』・『徒然草』などにその名が見えている。後冷泉・後三条・白河・堀河の四朝に出仕した女官で、多くの歌合にも参加し、当代有数の歌人として認められていたようである。⁽³⁾藤原定家の選んだ小倉百人一首に「春の夜の夢ばかりなる手枕に甲斐なく立たむ名こそ惜しけれ」という歌が入れられ、周防内侍はこの歌によって、後世、多くの人々に親しまれている。

近世においては小倉百人一首の庶民への普及はめざましいものがあつた。百人一首の注釈書が数多く板行され、その注も、歌学の対象としての注から一般民衆への啓蒙的性格を強めていき、⁽⁴⁾作者の似絵を描いた画帳や扁額、絵入り板本なども盛行した。⁽⁵⁾古浄瑠璃でもとりあげられるようになり、寛文十二年刊「小倉山百人一首」(上総少掾正本 山本九兵衛板)がある。「小倉山百人一首」の、初段では、定家が小倉山の山荘で百人一首を選び、作者の画像を画かせて秘蔵している由が語られ、三段めでは、定家が百人一首撰集の由来を物語る場面が仕組まれている。「小倉山百人一首」のこのような場面は、主筋の、定家と女三の宮との恋愛談には直接の関係はないのであるが、小倉百人一首の普

及を基底にして、観客の興味をひくために工夫された趣向であった。「小倉山百人一首」は人気を博した浄瑠璃であつたらしく、土佐浄瑠璃「定家」にもその影響が認められる。⁽⁶⁾ また、時代は下るが、宇治加賀掾の「百人一首万年宝」⁽⁷⁾ や元禄二年正月竹本座上演の「定家卿小倉色紙」⁽⁸⁾ なども、正本は伝わっていないが題名からみて小倉百人一首に関係する事柄を扱った浄瑠璃であつたと考えられる。

百人一首中の周防内侍の歌は、『千載集』や『周防内侍家集』には詞書が記されており、内侍の歌に対する藤原忠家の返歌もそえられている。『千載集』や『周防内侍家集』などの記載は次のようである。

二月ばかり月のあかき夜二条院にて人々あまたるあかして物語などし侍りけるに、内侍周防よりふして枕をが
なと忍びやかにいふを聞きて、大納言忠家は枕にとてかひなをみすの下よりさし入れて侍りければよみ侍り
ける
周防内侍

春の夜の夢計なる手枕にかひなくたゝむ名こそをしけれ
といひ出し侍りければ返事によめる
大納言忠家

契ありて春の夜深き手枕をいかゞかひなき夢になすべき

(『国歌大観』所収『千載集』による)

このような『千載集』などに記された周防内侍と忠家の歌の詞書には、内侍と忠家の歌の贈答の模様がありありと伝えられている。周防内侍が仮寝の枕がほしいと言っているのを藤原忠家を通りがかりに耳にして、「これを枕にどうぞ」と自分の腕を簾の内にさし入れたところ、周防内侍は即座に「春の夜の」の歌を詠んで興じながら断つた。「かひなくたゝむ」には「甲斐なし」と「腕」^{かひな}の意味を掛け、一首の中に枕の縁語の「夜」や「夢」の語を用いた当意即妙

の歌であった。忠家はこの歌に対してさらに返歌を作り、「深い契りの枕にしましう」と、軽妙に応酬したのであった。

『千載集』などに伝えられている周防内侍と忠家の機智に富んだ歌の応酬は、当時の貴族社会の美意識の最高の表現として讚美される類のものである。このような機智は歌人の理想とされ、この歌の成立を伝える逸話は広く流布したのであった。中世においても、阿仏尼はその著『夜の鶴』において、周防内侍を、「まだふみもみず天の橋立」と歌った小式部内侍に匹敵する歌才の持主として絶讃している。

近世になると、このような周防内侍と忠家の歌の応酬にまつわる逸話は、百人一首の普及とも相俟って広く庶民の間に流布したのであった。周防内侍について、忠家の申し出を「春の夜の夢計なる手枕にかひなくたむ名こそをしけれ」と歌って断ったその当意即妙の機智を賞讃している書物が散見される。浅井了意著とされる寛文元年板『本朝女鑑』は、その代表的なものとしてあげられる。この書では、周防内侍の「春の夜の」の歌は当意即妙の名歌で、小式部内侍の「まだふみもみず」の歌や伊勢大輔の「けふ九重に」の歌と同様に「奇特の秀歌」であると述べ、

天性堪能の上にも、道に心をかくることの怠りてはなりがたしと、人みな褒めたまへりし、

と、周防内侍が天性の歌才の上に日頃の修練を怠らなかつたことを賞揚している。時代は下るが、『百人一首一夕話』(天保四年刊)でも、周防内侍と忠家の贈答を両者の機智と教養の深さを示すものとして説明し、高く評価している。

しかし、江戸時代の庶民のたくましい猟奇的好奇心は、周防内侍と藤原忠家を機智に富んだ歌の贈答者としておくだけでは満足しなかつた。この逸話は近世的解釈が加えられて増幅されて当然の、なまめかしい情景を連想させる要素を持っている。その顕著な例として、万治四年板『女郎花物語』⁽¹⁰⁾と貞享四年二月板行『本朝美人鑑』⁽¹¹⁾をあげることができる。

『女郎花物語』では、周防内侍と忠家の逸話を紹介し、周防内侍を操の堅い貞女として賞讃している。その箇所を用してみよう。

周防の内侍、二てうのゐんにて、はるの夜にまくらもがなと、しのびやかにいふをきゝて、大納言ただいへ、これをまくらにとて、かひなをみすのしたよりさしいれて侍ければ、すはうのないし、

春のよのゆめはかりなるたまくらにかひなくたゝん名こそおしけれ

とよめりければ、かへりごとに、大なごんたゞいへ、

ちきりありてはるのよふかき手枕をいかゝかひなくゆめになすへき

むかしのひとは、かりそめのたはぶれにも、うたをよみ、ゆうに侍り、かくうはべには、ゆうにやはらかなるものから、したにはみさををたてゝ、かるぐゝしきうき名をおしみ侍る所、まことにやさしくあらまほしきわざにこそ、当時の人ならば、うたをばよまで、いかにいふかひなく、まくらにして、なれゝゝしきていにて侍らん、さやうにはかなきはるのよのちぎりなどの、ながきためしはなきならひなれば、終に後悔のたねとはなり侍るにこそ、

周防内侍の態度は、表面はやさしく、「したにはみさををたてゝ、かるぐゝしきうき名をおし」んだもので、「あらまほしきわざ」と激賞している。ここでは、内侍の当意即妙の機智をほめることよりは、男の一時的な誘いに軽率に乗らなかつた思慮のある態度を褒めているのである。

『女郎花物語』の周防内侍に対する記述には、周防内侍と忠家の歌の贈答に対する江戸時代の庶民の意識がかわってきていることに気づかされる。教養に裏づけられた機智を尊ぶ貴族社会の美意識は、江戸時代の庶民にはもはや人間関係を結ぶ最高のものとしては通用しなくなっている。男女の機智に富んだ応酬は、その機智そのものが讃美される

のではなく、男女間の直接的な結合・乖離を示すものとして問題にされるようになったのである。『女郎花物語』に賞揚された貞女としての周防内侍の美德はさらに強調されていくことになる。『女郎花物語』ではわずかに暗示されていた忠家がかねがね内侍に思いをかけていたとする発想は次第に明確となり、二人の関係はその方向で増幅されることになったのである。

その例として、延宝九年刊『名女情比』をあげることができる。この書物の周防内侍の項には、「忠家は内侍に思いをかけていた」と明記されている。同書では、さらに、忠家は内侍から「春の夜の」と詠みかけられたが返歌することができなかった。後世、それを残念に思った藤原定家が、忠家に代って「ちきりありて」の歌を詠んだ、という後日談を書き加えている。

貞享四年二月板行の『本朝美人鑑』でも、『名女情比』と同様に、忠家がかねがね美しい周防内侍に心を寄せていたとしている。その上、この書物では、二人の関係はさらに発展させられて、歌の贈答の後、二人は親密な間柄になったとしている。その箇所を引用してみよう。

内侍の哥ハたゞ時のたハふれによめりしを忠家の心にハマことしう思ひ入れていとうれしく心空になりたびく
いひをこしけり内侍もさすがいは木ならねバ物などいひしたしミて互たがいにむつまじくいひきこえけり

ここには、二人が結婚したことは明記されていないが、二人の間に男女の特別に親密な関係が成立したことを暗示していると解される。

なお、『本朝美人鑑』では、この後、忠家は出羽守となって赴任し、淋しくなった内侍は忠家に歌を詠んで送ったが、忠家からの音づれはなかったと結ばれている。やはり、二人の愛を全うさせる物語にまで発展するにははばかられるものがあつたかと思われる。

『本朝美人鑑』に語られているような、藤原忠家をかねが美しい周防内侍に心を寄せる人物であったとし、周防内侍も忠家の思いを積極的に受けいれて、二人の間には夫婦関係が成立したという発想は、元禄期を迎える頃の江戸時代の人々には至極当然なこととして受けいれられ、一般化していたのであろう。元禄期に江戸で流行した土佐浄瑠璃「周防内美人桜」に繰り広げられた周防内侍と忠家をめぐる世界は、このような百人一首の近世的解釈を基盤にしてもたらされたものであった。

三

土佐浄瑠璃「周防内侍美人桜」は、周防内侍の小倉百人一首に入れられた歌にまつわる逸話からもたらされた周防内侍と藤原忠家の恋愛談を軸にして、これに、内侍に横恋慕する高間王子と忠家との争いを織り交ぜることによって成立した。あらずじは次のようである。

第一

白河帝の御時、踏歌の節会に歌舞が催されると、蓑笠を着て大象に乗り、賤の女をひきつれた者が現れ、田打のさまを舞う（田打）。藤原忠家卿が詮議すると、高間王子時仁であった。王子は、勅勘を蒙って唐土の巫山に渡り、象を連れて帰朝し、人目をひいて罪のないことを奏したいと思つて異様な格好をして踏歌の節会に参内したと答える。帝は叡聞あり、高間王子の罪を許し、二元の官位を賜わる。王子は勅使として御衣を持参した周防内侍の美しい容色に心を奪われる。

忠家は宿直の見廻りをして、周防内侍が女童めのわらわに枕を持ってくるようにと頼んでいる所にきかかり、枕にするように

と簾の中へ自分の腕をさし入れて内侍と歌の贈答をし、内侍を口説く。内侍は忠家の愛を受けいれ、堀川の新邸へ宿下りした折に訪ねてくるようにと言って、忠家と会う約束をする。

高間王子は周防内侍と忠家が言いかわしているのを見て腹を立て、二人を殺そうとして象を放つ。象は忠家にむかってたけり狂う。忠家の家臣、いがきの助光遠が大象の首をつかんでもみ合うと、高間王子は象をとり返そうとして象の足を引く。双方が引き合う中に、象は胴中から二つに引き裂かれる。この騒ぎに宿直の武士たちが駈け出て仲裁する。

第二

高間王子は天下を手に入れようと計っているが、まず手はじめに周防内侍をなびかせようとして家臣に相談する。しのだの森次は中宮の侍女、松尾の局より、周防内侍が堀川邸へ下るといいうしらせを受け、道中で内侍を奪い取る相談をする。

数十人の盗賊風情の者共が内侍の輿を奪い取ろうとして争っていると、段平が馳せつけて敵を追い払う。段平は内侍を輿から降ろして自分が代りに乗り、再び襲ってきた森次の郎等にかつがれて高間王子の邸へ行く。

周防内侍を奪ってきたと思ひ込んだ王子が喜んで輿の戸を開けようとする。段平が飛び出し、森次や郎等を打ち殺し、襲いかかる者どもをなぎふせて御館へ帰る。

第三

ある雪の日、高間王子の馬に突き当たった女があった。かざいた衣きぬを取ったのを見ると、王子の文を周防内侍に届けに行った松尾の局であった。松尾の局は王子にむかい、内侍は忠家と深い仲なので文を開こうともしないから思い切るようにと告げる。王子は怒って、松尾の局をひっ立てさせ、自分は松尾の局の薄衣をひきかざして内侍の堀川

邸へむかう。

堀川の邸では、忠家卿をむかえて酒宴を催す。二人の女童は雪の庭に降り立ち、手鞠唄を歌いながら手鞠遊びの踊りをする（手マリ）。

王子は松尾の局と偽って内侍の邸に入り、内侍の袖をおさえて口説く。忠家卿がこの様子を見て飛び出すと、王子はかえって、官女の周防内侍に言い寄った忠家の不道をせめたて、忠家を縛り上げる。王子は内侍が意に従わぬので内侍も縛り上げようとする。すると、にわかには傍の雪の山が二つに割れて雪の精霊が現れ、高間王子一行を帰らせる。雪の精が面を取り外すと、それはいがきの助光遠であった。蔵人藤原重雲が再び攻めてくるが光遠はこれを追い払い、忠家の供をして津の国へ急ぐ。

第四

内侍は侍女玉の井を伴い、忠家の跡を追って住吉へ急ぐ。段平が現れ、段平のすすめに従い、内侍は猿まわしの姿にやつして道行きをする（周防道行）。

日暮れとなり、月の出を待って休む折、玉の井が疲れて眠ってしまうと、段平は内侍に我が恋を打ちあけ、内侍を抱いて逃げる。

段平は内侍を迎えにきた光遠につき当たり、争いとなる。内侍を追いかけてきた玉の井は段平に首を切られる。玉の井の首は宙に飛び上り、段平の喉笛に食いつく。光遠は内侍を背負って住吉へ急ぐ。

第五

忠家は住吉神社の神職国冬の小野の別殿で周防内侍と契りを結び、月日を送っている。忠家のもとへ松尾の局がきて、王子が逆心の企てをし、住吉明神へ参詣の用意をしていると告げる。

忠家が王子を滅ぼす時至れりと待っていると、王子は重雲を連れて住吉明神に参詣にくる。神主国冬は酒宴を催し、王子に酒をすすめる。内侍と光遠は万歳にやつして年の賀を祝い舞う（万歳）。王子が喜んでいると、光遠は王子を取りおさえ、松の大木を引き抜いて王子を取り返そうとする者どもを追い散らし、王子を引き立てて都へ急ぐ。

第六

高間王子は謀反の企てが明らかとなつて讃岐に流され、忠家は王子を捕らえた功によつて内侍を妻とすることを許される。

忠家と内侍の婚礼の酒宴の折、王子の残黨重雲が押し寄せてくる。光遠は重雲と戦い、重雲を生け捕りにして君の御前に引き立てる。

一段めの冒頭では、周防内侍の百人一首に入れられた歌をめぐる忠家との逸話がはめこまれている。その箇所のことばは次のようである。

たゞいへ卿。とのいのひとま立出て、しばしかいまみ給ひしに、其比さはありそうみ。かずある色のますほかい。ないしのきみと、うれしくて。をりしもごとのほのかにも。みしはかずかはこゝこそは。よき折ふしといひよらん。よすがを、待てそをはします。

ないしかく共白小袖、かたりの。きぬのたもとさへ。をもけき迄の。とめかうろ。かほりゆかしきめのわらは。やゝよもふけぬかねのこへ。枕もがたと召るれば、あつとこたへて。立いるにぞ。たゞいゑはつとたよりへて。みすのひまよりはしたなく、枕にもよとかいなをば。さしだし給ふにないしのかた、おどろく色にふりかへり、たぞやとがめみ給へは、かねて。そめたき、紫の。藤原の君也と、しらぬ。かほして、是はそも。をばしより

たるたまぐらの。かたじけなふは侍らへど。人の見とがめ候はゞ。たかしのはまの波ならで、あだなやたゝんとたゝいへの△御手をしとゝ、取給ひ。はるのよの、夢ばかりなる手枕に、かひなくなゝん名こそをしけれ、たゞいへうれしき取あへず。ちぎりありて、春のよふかきたまぐらを。いかゞかひなく。夢になすべきと。みすをかいやりよりそひて△かきくどきてぞ仰ける。⁽¹²⁾

この場面は、当時流布していた周防内侍と忠家卿の歌の贈答をめぐる逸話をそのまま劇中場面としたものである。有名な周防内侍と忠家の逸話をまず冒頭に置いて観客の興味をひき、それをもとにして新しい世界が展開していく。忠家は周防内侍をかきくどき、周防内侍も忠家の言葉に心乱れて密会の約束をする。周防内侍に横恋慕する高間王子がさまざまな計略をして邪魔をするが、ついに二人は正式の夫婦となって大団円となる。⁽¹³⁾

周防内侍は生涯独身で通したともいわれており、土佐浄瑠璃「周防内侍美人桜」で藤原忠家と結婚したとするのは架空のことで、史実としてはあり得ないことである。周防内侍と忠家卿の歌の贈答については、江戸時代においては近世的な解釈による増幅が行われたことは前にも述べたが、土佐浄瑠璃「周防内侍美人桜」においては、二人の歌の贈答を発端として二人の結婚談を作り上げているのである。

「周防内侍美人桜」では、周防内侍と藤原忠家の結婚をはばむものとして内侍に横恋慕する高間王子を登場させている。高間王子は帝位をうかがう反逆者という設定であるが、その行動は周防内侍への横恋慕の次元に終始している。浄瑠璃の舞台となった白河帝の頃は、皇位継承をめぐる権謀術数が絶えることなく繰り返されていた時代であったので、⁽¹⁴⁾白河帝と高間王子をめぐる皇位争いは題材としては不自然ではないのであるが、浄瑠璃ではその方向に展開されず、王子の抱いていた野望の域にとどまっている。浄瑠璃作者の関心は、周防内侍をめぐる恋愛談にむけられて

いたのである。

四

「周防内侍美人桜」の脚色で注目されるのは、象を舞台上に登場させて見せ場を作っていることである。

その趣向は一段めにある。周防内侍と忠家が言いかわしているのを見て怒った高間王子は、二人を殺してしまおうとして象をけしかけて放つ。忠家の家臣光遠が象の首をかいつかみ、それを取り返そうとした高間王子が後足をつかみ、双方互いに力まかせに引き合う。その場面は次のように描かれている。

此物をとに。鳥い川。いがきの助みつとう。をちゑんに相つめしが。はんくはいかくやととび来て。む二む三に大ぞうの。平くびをかいつかみ。ゑいやくともみあふたり。高間のわうじとんで出。某が大ぞう也。こなたへ渡せととびかかり。あと足をかいつかみ。ゑいやつと引給ふ、いがき笑つてこは上郎のにあわざる。其御振舞は何事ぞ。但シわがしうたゞいへに。いしゆばし有てや此けだ物。はなち給ふかとかくに。しめころしすつべき也。そこのき給へとこなたへひく。こはすいさんと引もどす、たがいにあらそふ其いきほひ、はんぞくたいしまけいしゆらかくやと。みへてすさましく、さしもにたけき大ぞうを、どう中より引切て、たがいににらんで立ちりしは、扱ばんぶのわざとはみへさりけり。

二人の剛勇の者に首と足を引張られて、さしもの大象の胴中は二つに裂けてしまう。これは、まさに後世、歌舞伎十八番「象引」で演ぜられるようになった象引の場面そのままである。

象は近世初頭に来朝して評判となり、⁽¹⁵⁾浄瑠璃や歌舞伎の舞台にも登場して人気を集めていた。象の舞台化は相当早くから行われていたと思われるが、現存資料でさかのぼり得るのは明暦三年五月の奥書を持つ古浄瑠璃正本「感陽宮」^(マ)

が最初である。「感陽宮」の初段に、身長九尺五寸、上下の齒は百三十三枚、左右に牙を持つ樊噲という怪力の持主が、始皇帝のさしむけた巨象を締め殺す場面がある。その場面は次のようである。

ぞうもはんくわいをめかけ、はなあらしをふき、くろけふりを立、一もんしに、とびかゝる、はんくわいくゞつて、ひらくびをゑたりやあふといたきつく、あくぞう物のかす共せず、はんくわいはねたおす、はんくわいひらりととびのり、はなさしとつかみつく、前になげてかけんとすれは、かいめぐりていたきつく、こくうむりやうにくるいければ、ゑんたんは、はんくわいかかけられたら、さいごそと、こたてを取てはをがみ、こぶしをにぎつて立いたり、しくわうていは、われ年月かのおきたるをんとくに、其物あますなくと、しきりに力をそへ給ふ、され共はんくわい物のかす共せず、ぞうのひらくひしめつけて、ゑいやくとおしければ、あくまにたけき大ぞうも、はんくわいにしめころされ、せんごもしらすたをれける⁽¹⁶⁾

この場面は歌舞伎十八番「象引」の濫觴とされている⁽¹⁷⁾。しかし、ここでは象は「天魔厄神の荒れたるもかくやらん」と思われる樊噲の怪力のためにしめ殺されたのであって、二人の勇士が引き合ったために殺されたのではない。厳密な意味では象引の趣向ではない。

歌舞伎の舞台に象が登場したのは、現存の資料では元禄十三年三月に江戸の山村座で上演された「薄雪今中将姫」が最初である。この狂言の一番目に、竜虎將軍が唐から連れてきた大象をけしかけて放ち、象が逃げまどう広風を喰い殺すところを、八劍王子が飛んで出て象の平首をしっかつかみ、「王子が力これを見よ」と、さっと引き裂いてしまふ場面が仕組まれている。この場面は評判になったものと思われる。狂言本の挿絵には中村伝九郎扮する八劍王子が、右手で象の鼻を持ち上げ、左手で前足をおさえて大象をひき裂いているところが描かれている。

この場面でも、伝九郎の象を相手の怪力発揮が見せ場になっているのであって、二人の人物が象を引き合う趣向は

使われてはいない。

「薄雪今中将姫」上演の一年後、元禄十四年正月に江戸の中村屋で「傾城王昭君」が上演された。狂言本が現存して、その内容を知ることができる。入鹿大臣が白象に乗って登場し、源内の諫言に腹を立て、象をけしかけて源内にむかわせる。源内の妻宿木が飛び出して象を繋ぎとめ、逆に入鹿の方へ象を追い放す。源内と宿木夫婦は入鹿を滅ぼして象に乗って退場する。この狂言で評判になったのは女の宿木が象を手懐けてしまう所作がかりの演出と、普賢菩薩の見立てによる源内夫婦の像に乗っての幕切れの趣向にあったと考えられる。象は宿木の呪力によって馴致されたのであって、この作品では象を相手の力技は演じられていない⁽¹⁸⁾。団十郎の荒事が演じられてはいるが、それは象を相手にしたものでなく、入鹿ら悪人にむけられたものである。この狂言は、一般には象を歌舞伎の舞台に登場させた最初の作品としてあげられているが、やはり象を引き合う趣向は使われてはいない。

以上のような資料をみると、日本には棲息していない巨大な象が近世初頭に中国からもたらされて人々の耳目を驚かし、浄瑠璃や歌舞伎でも象を使った趣向が工夫されたのであったが、それは登場人物の象を相手にした怪力をみせる場面として仕組まれるのが普通であったと考えられる。象を引き合うという象引きの趣向は元禄期においてはまだ試みられなかったように思われる。

宝永五年の刊記のある土佐浄瑠璃「続源氏」でも、三段めで、宋使の献上物の大象二匹が舞台上にひき出され、逆心を抱く頼親がこれをけしかけて大暴れさせ、公時がたけり狂う象にとびかかって投げとばし、二つに引き裂いてしまふ場面が見せ場として仕組まれている。

宝永六年七月、山村座で上演された「傾城雲雀山」の一番目では、初代山中平九郎の扮する山の辺の親王が象を引き裂いて殺す場面が仕組まれている。

以上のように、元禄期を中心として現存する狂言本や浄瑠璃本に、舞台上に象を登場させ、登場人物がたけり狂う象を相手にして怪力を発揮する場面が見せ場として仕組まれているものを数多くあげることができるのであるが、何れも、象を相手に一人の人物が剛力をふるい、一人の力で引き裂いてしまう趣向である。二人の勇猛な人物が一匹の象を引き合って引き裂いてしまうという象引きの趣向は「周防内侍美人桜」に至るまで文献上に確かめることはできないようである。

「周防内侍美人桜」一段めの、いがきの助光遠と高間王子の二人がたけり狂う象を奪い合い、ついに象の胴中が二つに引き裂かれてしまうという場面は象引の嚆矢といってもよいであろう。象引は天保三年（一八三二）、七代目市川團十郎の制定した「歌舞伎狂言組十八番」の中に市川家の「家の芸」を代表するものとしてあげられることになる。「象引」の語はこの時はじめて使われ出したようであるが、その趣向の淵源は土佐浄瑠璃「周防内侍美人桜」にあったのである。

五

「周防内侍美人桜」には象による荒事の趣向のほかにも多くの見せ場が仕組まれている。それは土佐浄瑠璃の得意とする節事の場面である。摘出すれば次のようである。

田打 宮廷の踏歌の節会に蓑笠を着た男が賤の女を連れて現れ、田打の様子を歌いながら舞う。(第一)

手マリ 堀川邸の酒宴に、二人の女童が手鞠唄を歌いながら手鞠遊びの踊りをする。(第三)

周防内侍道行 周防内侍は猿まわしの姿にやつして住吉にむけて道行きをする。(第四)

万歳 住吉の社前で、周防内侍と光遠は万歳にやつして年の賀を祝い舞う。

(第五)

田打・手鞠・猿まわし・万歳というように、当時の庶民生活を切り取って節事に綴り、それを舞踊表現によって舞台上に再現しているのである。これらの場面は一曲の劇展開を一時中止する形で演ぜられている。これは土佐浄瑠璃に常套的に採用されている脚色法である。この脚色法については詳述したことがあるので省略する。⁽²⁰⁾

「手マリ」の詞章の中には「梅の折枝」の語が見える。それは、

わかのうちへは。かたほなみ。かたすそは、梅の折枝、中は思ひのそり橋を、嵐にさつとわたしまり。

という詞章である。同様の手鞠の場面が、土佐浄瑠璃「京四条おくに歌舞妓」五段めにもあり、これにも「梅の折枝」の語がある。真鍋昌弘著『中世近世歌謡の研究』⁽²¹⁾によれば、近世中期(文化・文政期)には近世手鞠歌として「肩裾は梅の折枝」という詞がパターン化するようになっていた。土佐浄瑠璃「周防内侍美人桜」や「京四条おくに歌舞妓」の手鞠の詞章は中世の『閑吟集』にみられる「梅の折枝」の手鞠歌への伝承過程を示すものとしても注目されるものである。

「周防内侍美人桜」の手鞠歌や猿まわしは浄瑠璃の中にとり入れられることによって原型とは異なったものになっているが、当時流行の手鞠歌や猿引歌をアレンジしたものであることはいままでもない。紅絹の手細のほうかむりに、太鼓とささらを持ち、「手がひの猿のくびかせ」の「手なはゆるめてまはしゆく」猿まわしの姿や、「すはうに小ゆひまこなして、ふぜい有げに立いづる」美小人と、「ほう、かふりしておかしげ」な若男との万歳や、蓑笠を着た男に従って現れた田打の様子を踊る賤の女や、手鞠をする二人の女童など、何れも当代の庶民の風俗を舞台上に再現したものである。

このようにして、「周防内侍美人桜」は一曲中に盛り沢山に当時の庶民生活を反映する場面を節事として挿入して、生き生きとした江戸情調をかもし出している。平安末期の周防内侍の世界は、これによって元禄末期の世界に再生されたのである。

六

土佐浄瑠璃「周防内侍美人桜」が制作されたのは、近世において小倉百人一首の流行によって周防内侍が有名になり、周防内侍と忠家の歌の贈答をめぐる逸話が流布したからである。そして、浄瑠璃制作の直接の刺戟になったのは貞享四年二月板行の『本朝美人鑑』ではなからうか。

『本朝美人鑑』には周防内侍の他に、衣通姫を巻頭にして、和泉式部・小野小町・紫式部・清少納言など三十六人の女性があげられ、それぞれの女性たちの説話が記されている。『本朝美人鑑』は初版の刊行の後、何度も版を重ねている⁽²²⁾『本朝美人鑑』は多くの読者層を持ち、広く庶民の間に流布した書物であったと思われる。土佐浄瑠璃「周防内侍美人桜」の「美人桜」という題名⁽²³⁾も、『本朝美人鑑』から思いつかれたのではなからうか。「美人桜」としたのは『美人鑑』の「鑑」のかわりに「桜」の語を美女の称として用いたのであろう。土佐浄瑠璃には「桜小町」という浄瑠璃もある。桜は美女を象徴した語と解してよいであろう。周防内侍が美人として有名であったことは『本朝美人鑑』をはじめ、諸書の伝えるところである。

「周防内侍美人桜」の副筋としてからめられた高間王子の謀反は伏線の域に留まり、劇展開の中心場面には扱われていない。一曲は謀反劇とはならず、百人一首の周防内侍の歌を本説とする恋愛談を展開したものになっている。そこに近世化された周防内侍と藤原忠家の人物像をみることができるのである。

注

- (1) 拙著『近世芸能の研究―土佐浄瑠璃の世界』(武蔵野書院 平成元年) 参照。
- (2) 拙編『土佐浄瑠璃正本集』第一(角川書店 昭和四十七年) 所収解題参照。
- (3) 上村悦子『王朝女流作家の研究』(笠間書院 昭和五十年) 所収「周防内侍研究」。
- (4) 田中宗作『百人一首古注釈の研究』(桜楓社 昭和四十一年) 一九六ページに「江戸初期から他の古典注釈書に先がけて注釈絵入本が流布してきていることを知ることができる。」とある。
- (5) 森 暢『歌仙絵・百人一首総』(角川書店 昭和五十六年)
- (6) 注1掲出拙著三六五頁参照。
- (7) 信多純一編「宇治加賀掾年譜」(横山重編『加賀掾段物集』〈古典文庫 昭和三十三年〉所収) には「正本不明の加賀掾弟子分語り物一覧」の中に挙げられている。
- (8) 明和板『外題年鑑』の「当流竹本筑後掾義太夫事」の項にあげられている。同書には元禄二年正月二日とある。作者不詳。
- (9) 黒川真道編『日本教育文庫―孝義篇下』(日本図書センター 昭和五十二年) 所収『本朝女鑑』による。
- (10) 注9掲出『日本教育文庫』所収。引用文は同書による。
- (11) 倉島節尚編『本朝美人鑑』(古典文庫 昭和六十年) 所収の解題。引用文は同書による。
- (12) 注2掲出書所収の本文による。以下の「周防内侍美人桜」の引用もこれによる。ただし、節付けは省略する。
- (13) 注3掲出書二六六ページ参照。
- (14) 注3掲出書二七二ページ、川崎庸之編『人物・日本の歴史3王朝の落日』所収「白河法皇」参照。
- (15) 『演劇百科大事典』(平凡社 昭和三十五年) の「象引」の項(郡司正勝執筆) によれば、象は応永・慶長・享保と三度来朝している。
- (16) 横山重編『古浄瑠璃正本集』第二(角川書店 昭和三十九年) 所収の本文による。
- (17) 注16掲出書解題、服部幸雄「象引考證」(『歌舞伎の世界 悪と美の劇空間』〈有精堂 一九八八年〉所収) など。

- (18) 注17掲出服部幸雄論文に詳しい論述がある。
- (19) 注18に同じ。
- (20) 拙稿「土佐浄瑠璃に於ける節事及び道行」(守随憲治編『近世国文学』研究と資料)〈三省堂 昭和三十五年〉所収)
- (21) 桜楓社 昭和五十七年
- (22) 注11掲出書所収解題
- (23) 現存正本の原題簽に「美人桜」とある。木下板正本の見返しに貼付されている「六段物板行出来合目録(六段物目録)」では、題名として「周防内侍美人桜」と「美人桜」が併用されている。